

氏 名 赤尾 光春

学位（専攻分野） 博士（学術）

学位記番号 総研大甲第 887 号

学位授与の日付 平成 17 年 9 月 30 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 帰還と離散のはざまで—ウクライナ地方都市におけるユ
ダヤ人巡礼の民族誌—

論文審査委員 主査 教授 竹沢 尚一郎
教授 白杵 陽
助教授 西尾 哲夫
教授 西 成彦（立命館大学）

論文内容の要旨

本研究は、主として現代イスラエルに居住するユダヤ人が、ウクライナの一地方都市ウマンに眠る開祖の墓へと向かう巡礼（ウマン巡礼）についての民族誌的研究である。

本研究が第一に課題とするのは、このディアスポラの地へのユダヤ人巡礼を通じて、イスラエルという領土国家が現代ユダヤ人社会に対してもつ求心力とディアスポラの地がもつ遠心力との間にみられる緊張関係の力学を解明することにある。ウマン巡礼の現場でこの緊張関係がどのような形で現れているのかを、巡礼者へのインタビューと巡礼現場における様々なパフォーマンスの観察を通じて考察する。それによって、イスラエルの建国から50年以上が過ぎた今、「ディアスポラの聖地」への旅を通じて、現代のユダヤ人が、「ディアスポラ/イスラエル」という二項対立的な関係をいかに乗り越え、また、いかに再解釈しているのかを明らかにする。

第二の課題は、イスラエルという主権国家での居住経験を経て、ディアスポラにおけるユダヤ人と非ユダヤ人の関係が、いかなる変質を遂げたのかを解明することである。領域国家イスラエルの出現により、ディアスポラにおいて社会的弱者であったユダヤ人は、一夜にして社会的強者となり、逆にパレスチナ人に代表される社会的弱者を抑圧する側に立つことになった。現代のユダヤ人が、ウクライナという異郷への旅を通じて一時的な擬似離散を体験することは、社会的強者・弱者関係の逆転が現代ユダヤ人社会にどのようなインパクトを与えたかを鮮明にあぶりだす契機となる。さらに、イスラエル国家の領域の外におけるユダヤ人と非ユダヤ人との関係の変質を観察することを通じて、今日のユダヤ人が、どの程度イスラエル社会に「土着化」し、また、どの程度「ユダヤ人国家」を内在化しているのかを推し量ることにもつながる。

以上二つの中心的課題を柱とする本稿は、全3部7章構成である。

第一部「ウマン巡礼の歴史」は、ウマン巡礼の文化史的背景とその通史の記述である。まず、ユダヤ文化における聖者廟崇拜の歴史を概観する。この過程では、「イスラエルの地」から放逐された一部のディアスポラ・ユダヤ共同体において発達した代替的な聖地観、すなわち、義人[tzaddik]と呼ばれる聖者の肉体が「イスラエルの地」を延長するという世界観が示される（第一章）。次に、この精神主義的な聖地観を、ウマンの聖者廟に眠るハシディズム・ブレスラフ派の開祖ラビ・ナフマンが究極まで推し進めた結果、自らの墓に対する将来の巡礼義務を教義の中核に据えることになった経緯を記述する（第二章）。最後に、約200年間にわたる巡礼の通史上、聖地ウマンの絶対化に支えられたナフマンの弟子達が、二つの世界大戦、共産主義革命、ユダヤ教弾圧、スターリン体制といった過酷な社会政治状況下にありながら、命がけで巡礼を敢行し続けたという、初期巡礼における苦難の歴史に焦点を当てる（第三章）。

第二部「競われる景観」は、ペレストロイカとともに復活した大衆巡礼によって発生した、ユダヤ人巡礼者とウクライナ住民との葛藤の諸相についての考察である。前半では、ウマン市議会で収集した公文書を基に、ウクライナの地方都市に突如現れたユダヤ教の巡礼地がどのように位置づけられているか、また巡礼地の土地開発を巡り、ユダヤ人巡礼者組織とウクライナ地方政府との間でどのような対立関係が生じているか、を分析する。こ

れにより、観光地として経済的利潤を追求するウクライナ地方権力と、国際的な政治力および強力な資本を背景に、聖地の「奪還」とその開発権の独占を目指すユダヤ人巡礼組織の思惑のズレが浮き彫りにされる（第四章）。後半では、巡礼地で実施した参与観察とインタビューを基に、ユダヤ人巡礼者と巡礼地周辺のウクライナ人住民との相互行為のメカニズムを解明する。とりわけ、聖地の「真性性」(authenticity)を独占するユダヤ人側が、ウクライナ住民を「聖地」から締め出した結果、通常の観光地に見られるはずのホスト・ゲスト関係に逆転現象が生じていることが指摘される。（第五章）。

第三部「競われる二つの聖地」では、エルサレムとウマンという二つの聖地を巡る論争を通して露呈された、ユダヤ人巡礼者相互間に生じる聖地観の懸隔について考察する。ここでは、ウマン巡礼が復活するに至った社会的背景を把握し、80年代イスラエル社会において、世俗的なユダヤ人がユダヤ教へと回帰する「悔い改め」運動が盛んであったこと、また、スファルディームと呼ばれる中東諸国出身のユダヤ人による聖者廟崇拜復活の気運が高揚したことなどを取り上げ、各流派の伝統を原動力にした国民的巡礼への発展過程が解明される（第六章）。最後に、ウマン巡礼の大衆化がどのような問題を惹き起こしつつあるのかを検討することにより、今日イスラエル国家が抱える苦悩を明らかにする。とりわけ、物理的にディアスポラの聖地へ赴くことそのものの是非を巡り、ディアスポラ志向の強いユダヤ教超正統派と、イスラエルの建国を「追放/捕囚」の終焉とみなす国家宗教派間に存在する、熾烈なイデオロギー的対立構造が露呈される。このプロセスを詳細に記述することで、現代イスラエル国家で展開されつつある、イスラエルの求心力とディアスポラの遠心力との弁証法的緊張関係を、ウマン巡礼という文化現象を通じて読み取ろうという試みである（第七章）。

以上の記述を通して、聖書時代に起源を持つとされると同時に、近代国民国家として建国された両義的な「ユダヤ人国家」の本質が脱神話化されるとともに、数千年に及ぶユダヤ史においていまなお決着のつかぬ、ユダヤ人と「聖地／郷土」との縛れた関係が、そしてまたユダヤ人と「場所」との相克の諸相が、自ずと浮かび上がることになる。

論文の審査結果の要旨

赤尾光春の博士請求論文、「帰還と離散のはざまで—ウクライナー地方都市におけるユダヤ人巡礼の民族誌—」は、本文の3部、および序論と結論からなっている。

序論において、赤尾はユダヤ教の崇拝形式を3つに分類する。①2千年に及ぶディアスボラ状況の中で、聖典のみを奉ずることでアイデンティティを保ち続けた「書の民」。②シオニズム運動を通じて回復した「祖国」イスラエルに固執する「地の民」。③ユダヤ教の歴史を貫いて存在してきた、義人崇拝を核とする「人の民」である。従来、注目されてきたのは「書の民」と「地の民」の対立であり、領域国家としてのイスラエルを絶対視する後者のシオニズムに対し、「書の民」としてのユダヤ教超正統派は「ユダヤ人国家」の存在さえ認めてこなかった。これに対し、赤尾が本論文で着目するのは「人の民」としての崇拝形式であり、イスラエル外にある義人崇拝の「聖地」への巡礼が、「書の民」と「地の民」の対立を止揚することが可能か否かを検討しようとするのである。

第1部「ウマン巡礼の歴史」では、現ウクライナの地方都市ウマンへの巡礼の歴史が再構成される。これは、17世紀以降東欧ユダヤ人世界に広がったハシディズムの義人の一人、ラビ・ナフマンにまつわる聖地巡礼であり、1810年のナフマンの死につづく19世紀の確立期、ロシア革命以降の衰退期、旧ソ連邦の解体以降の復活期に分けて、その歴史が説明される。この部分は、ロシア語、ヘブライ語、英語、イーディッシュ語等の文献を駆使した歴史的再構成であり、きわめて読み応えのある部分である。

第2部「競われる景観」では、聖地をめぐるユダヤ人巡礼組織と、ウクライナの地方行政および地元住民との間の葛藤が記述される。今日では毎年1万を越える単位で訪れるユダヤ人巡礼者は、とくにユダヤ教の新年を挟む数日間、ナフマン廟周辺を象徴的に支配する。かれらはその間、ユダヤ教の慣習を強制し、女性との接触を忌避するなど、住民とのあいだで葛藤を生じさせていることが、著者のフィールドワークを通じて明らかにされる。

第3部「競われる二つの聖地」では、巡礼に関するヴィクター・ターナーの理論等が検討されたのちに、巡礼を葛藤の舞台としてみる視点が提示される。それは、ユダヤ人巡礼者／ウクライナ住民の葛藤であり、ユダヤ人の中でもアシュケナジーム／スファルディムの葛藤であり、シオニズム／超正統派ユダヤ教の葛藤であり、それらの葛藤がウマン巡礼において重層的に発現している様子が、きわめて興味深く描き出されている。

以上のような構成をもつ本論文は、ウマン巡礼という、これまで本邦はもちろん、イスラエルにおいてもなされたことのない研究分野における開拓的研究である。歴史的研究とフィールドワークを結合させた本研究は、英語、ロシア語、ヘブライ語を駆使できる赤尾によって初めて可能になったものであり、高い評価を与えられるべきである。また、ユダヤ人社会が内外に生じさせている様々な葛藤を、巡礼を通じて明らかにしていく手法は見事であり、赤尾の研究者としての素質を示している。

一方、潜在的な葛藤の発現機構としてのウマン巡礼が、本国のイスラエル社会にとっていかなる意味を持ちうるのかは、必ずしも十分に解明されておらず、ディアスボラ／イスラエルの対立が乗り越えられる可能性が指摘されるだけに終わっている。理論的検討においては若干の不十分さを抱えた研究ではあるが、それはある面からいえば、問題提起が大きすぎたためである。この面での理論的深化を今後に期待するとしても、現代ユダヤ研究、

巡礼論および社会葛藤論として本論分は十分なレベルに達しており、審査委員会では全員一致で学位の授与に値すると判断した。